

# 信仰の量り

～信じる事を回復する人生～

ローマ12:2~3 5:1

教会に来ると信仰が大切であると言われます。神様がいるなら目の前に現れてくれたら簡単に信じますというかもしれません。しかし神様はわざわざ私達に見ずに信じるものは幸いである。という言葉を残しました。この「信仰」という言葉、これを動詞的な意味でみると信頼です。なぜ神様が教会に信頼という言葉、信じるという言葉、回復させようとするためにわざわざ見えない神様の姿を信じさせるようにしたかったのでしょうか。「神様は、なぜ、わざわざ見えなくしたのか」頭ではわかっています。「見ゆるところによらずして、信仰によって歩むべし、何をも見ず、また聞かずとも神の御約束にたち」と私達は歌っています。だから良くはわかっていますが、目に見えるものが大事なのではない、目に見えないものに意味があるのだ。ということもわかっています。わかっているのですが、やはり見たいのです。私達の欲望には見たいという欲が潜んでいます。神様はそんな私達の欲望にたいして信じる事を回復するようにしたかったのです。なぜかという、人が「愛する」ためには信じること以外のプロセスはないからです。

アダムとイヴが愛し合うとしてつくられました。彼らは、裏切られたのです。「誰に?」「自分の愛する人に」「あなたのつくったあなたの女が食べると言ったから食べたのです。」その時彼女は「え?」と思います。確かにそうなんです。だけどきつとアダムは言ってくれたらと思ったのです「神様ごめんさい。僕がちゃんとできなかつたから、彼女がそんなことをしてしまったのかもしれない。僕が悪かつたです。」と言ってくれたらと思っていたのです。ところがアダムはそうはできなかつたのです。なぜかという、あの木の実を食べたからです。あの木の実を食べた瞬間から私達は自分を守らなければいけなくなりました。誰も自分を守ってくれる人がいません。だから私達は今でもそうです。何か指摘され、責められた瞬間、「あの人が。」となるのです。私達の心に深く潜んでいるものです。私達は、それを今、鑑として着ています。それがプライドというものです。「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を超えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えて下さった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。(ローマ12:2~3)」「ですから、信仰によって義と認められた私達は、私達の主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。(ローマ5:1)」

まず私達に大切な事は、この世と調子を合わせずに神様はそれを見てどう思っているのか、そして完全か完全ではないか、何が正しいのかをわきまえるために変わろうとする決断をしなさいと言われています。「私は自分の考えを貫くのです。」それであるのなら神様の恵みの中で生きる事はないわけです。自分のルールで生きていけばいいのです。ところが私達は神様に認めて、受け入れて、なぜそれをして欲しいかという、本当の自分の姿に戻りたいからです。

- ①「思うべき限度」は「フロネオウ」
- ②「思い上がる」は「ヒュペアフロネオウ」
- ③「慎み深く」は「ソウフロネオウ」
- ④「思うべきである」は「フロネオウ」

基本形は「フロネオウ」である。自分を過大評価するのは「ヒュペア+フロネオウ」。正気で自分を見るのは「ソウフロネオウ」である。思い上がるというのは、自分はそうではないのにそう思っているという態度について言っているわけです。正気であるというのは慎み深いという意味です。「ヒュペロオン」名詞。「彼らは町に入ると泊まっている屋上の間に上がった。」「屋上の間」「the upper room」自分を過大評価するとは上から目線で人を見る。「慎み深く」は「ソウフロネオウ」正気になって考えよ。酔った状態、中毒状態を示している。私が一番状態、この状態は「エゴホリック」自己中心である。パウロは正気になれと勧告している。私達は上から物事を見ようとするところがあるのです。思い上がるというのは私達が人々を見下ろす姿です。Upper stand というものです。でも相手を理解するという姿勢は under stand です。その人の下に立つ。そしてこの理解するという行動は結果、信頼関係を生み出します。ですから神様は慎み深く正気になって考えろ。と言っています。「正気になれ」というのはどのような事かという酔って中毒状態になっているあなたに対して「戻れ」と言っているの

です。だから私達が思い上がって人を上から判断している時は私達は酔っぱらっているのです。」upper stand であるというのは私達の全ての心の崩壊から始まっています。そこで、神様は目に見えないそんな神様を信じさせる事によって、見せる事なんて出来ませんが、でもそんな私達に対して信頼関係を回復するために目に見えない姿をして彼は私達に自らの姿を現そうとしているのです。皆さんは今、信頼を持つようとしているのでしょうか。信じるというのは信じてあげるではありません。確かに信じたことで裏切られるのです。なぜかという私自身が裏切っているという事を理解するという事はあなた自身もそうだとする事を知っているはず。そんな私達がどのようにして、愛を回復していくのかという裏切っても赦されて、もう一度信じようとしてくれる姿です。信じようとする行動はこの教会からスタートします。この何度でも信じようとする姿、その人を愛そうとする姿を神様は本来の人のあるべき姿にもどすプロセスとして用いているのです。おのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて慎み深い考え方をしなさい。信仰の量り、これがあなたに与えられた信じようとする行動なのです。すなわち量りが違うという事です。あなたとあなたの隣にいる人の量りの大きさが違うという事があります。すなわち、この量りは成長するのです。それは私達クリスチャンがどれだけ人を、神様を信頼しようとするかによって変えられるのです。ですから信仰によって義と認められた私達は私達の主イエス・キリストによって神との平和をもっています。信仰とは信頼です。誰かを、神様を信じようとする心なわけです。今、私達が見ているものは多くのものが疑い深い。ニュースを見ても本当かか疑いたくなるような情報がいっぱい。そのような中で私達はもう一度この信仰という言葉、この言葉を正しく考え直す時がきています。信仰とは宗教ではありません。信じるという事の尊さをもう一度私達が仰ぎ求めることです。クリスチャンが信じることをせず、この日本を信じる事をせず、何が変えられるのでしょうか。このままいったら悪くなることはわかっています。だから信じるのです。信じる事は私達にとって回復なのです。

- \*信じる事の回復 はどのように素直 蛇のようにさどく
- \*高ぶりを取る 正気素直な生き方
- \*慎み深く 自らを変える

さどく、というのは賢さです。おろかにならないで、でも信じる姿それを私達はいつも願っていかねばいけません。そして高ぶりを取り去らなければいけません。私達の心のなかには人を見下そうとする心があります。でも人を見下す時、あなたは何になっているのでしょうか。あなたは神になつています。しかし、その神様でさえ決して人を見下したりはしなかつたのです。彼はあの家畜小屋で産まれて、糞土にまみれたところで寝ていたのです。そのようなイエス・キリストは「あなたの罪は赦された」と言ったのです。彼の生き方とは責めるのではなくて赦す生き方だったのです。そして最後に彼は「あなたの御心の通りにしてください。」と言って十字架にかかっていきました。

人として産まれ、人の弱さを知って痛みもわかり、苦しみを理解し、それでも彼は「いや、私の願う通りではなく、あなたの御心の通りに私は生きたい。」と言われたのです。

## まとめ

私達がしなければならない事は一つです。信じようとする事ではないでしょうか。ローマ章では思い違いをしてはいけません。正気になってあなたが神様にどのように愛されたかを思い起こし、その量りによって生きなさい。と言っています。

(要約者:小根久保 麻由美)

(2019年10月20日)